



ワード・パレスチナ・ありんこちゃんの会のブース

一月二十八日、山口
市の県総合保健会館で
多文化共生フェスタが
開かれた。

多文化共生フェスタ



長女のリカが一九九五年からパレスチナで貧しい母子の保健プロジェクトに関わっており、それを支援するNGOの「ワード・パレスチナ・ありんこちゃん」の会も共催団体の一つとして参加した。

諸外国に関係しているNGO、民間団体などがパネル展示や民芸品の販売、民族衣装の試着などをし、講演会や演奏会も開かれた。

〈共に生きる〉
国家・民族・宗教・文化などの違いの壁を越えて「共に生きる」ことが大切なのは言うまでもない。

しかし、利害がからんで意見の対立などで共生は困難となり、二

十一世紀の今も世界の三十を超える地域で紛争が起きている。が、共生の難しさは国際紛争だけでなく、私たちの身近な問題でもある。妻が夫を殺しバラバラにする。親が子を、子が親を殺す、いじめ、幼児虐待などあげればきりが無いほどである。

無責任な利己主義がまん延し、他者との交わりが薄れ、共生という意識がなくなっている。

子供が食べた学校給食の費用を払わない親がたくさんいるという報道には、日本もここまで駄目になったのかと絶望したくなる。

サビエルがヨーロッパに伝えた日本人観、「貧しいが、勤勉で正直。名誉を重んじる、今まで見たことのない優秀な国民」と言わせた日本人はどこに行ったのだろう。

その原因は何なのか、多文化共生も必要だが、もつと自分たちの問題を考えなければと思いつつ、フェスタの会場のブースを見

て回った。と、一枚の見覚えある写真が目についた。

〈サビエルの遺産〉
スペインのヤマグチ公園の雪景色である。サビエルが縁で、山口市とナバラ州の州都パンプローナ市が姉妹縁組をしたのは一九八〇年。それを記念してパンプローナ市内にヤマグチ公園が造られ、一角には日本庭園もある。昨年、公園前のホテルに泊まり、公園のあまりの広さ、散策するスペイン人の多さにびっくりした。

姉妹縁組に関わった人たちを中心に山口ナバラの会が結成され、会員は二百人を超える。

写真があつたのはナバラの会の展示ブースで、日本庭園を造った多々良さんは「四年前に山口県もナバラ州と姉妹縁組したのだから、今度はナバラのサビエルゆかりの地に桜の木を千本ぐらい植えて「ヤマグチ桜の森」を造りたい」と熱っぽく話された。

キリスト教禁止とい



スペインから届いたヤマグチ公園の雪景色

う長い苦難の時代を乗り越え、行政や民間ベイスで、サビエルのまいた種は芽を出し、交流から共生へと着実に実を結んでいることを感じた。

共生は、このような小さなことの積み重ねの中から生まれてくるに違いない。そして、サビエルこそ、日本で初めて国際交流を実現し、共生しようとした人だと確信したのである。

（元山口放送取締役ラジオ局長）